

カーライルとアーノルド

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学会 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石田, 憲次 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180221-260

カーライルとアーノルド

石 田 憲 次

私は昨年、京大英文学会主催の厨川白村博士追悼講演会と、岡山大学に於て行われた日本英文学会中国支部大会とで、上掲の題目の講演を行った。この一文は大体同じ材料を用いて新に書きなおしたものである。

アーノルドは青年時代に影響を受けた人々の名前を挙げての中にニューマン、エマーソンと共にカーライルを加えている。それはもとより当然のことと思われるのであるが、併し成熟期の彼はカーライルに対して余り好意をもっていないようである。「アメリカ講演集」の中では、「大文豪」(a great writer)ではないと割切っているし、カーライルの死後間もなくフランスの Fontanès 氏に寄せた一八八一年三月二十五日附の手紙に於ては、「私は最初からカーライルは余り好かなかつた。彼が英国人に真剣になれと言つたのはニューカッスルに石炭を運ぶようなものだつた」という意味の齒に衣着せぬ感想をもらしている。アーノルドのこの態度は少し先人の功を認めるに吝かな嫌はあるまいか。少くとも礼に缺けているところはないか。アーノルドには多少商売敵と言つたような競争意識があつたのではあるまいか。併しさような臆測を許すには二人の年令の開きが余りに大きすぎる。リットン・ストレーチーがニューマンとマニングとの間に想像したような深刻な関係はあり得ない。そういう私情で万事を片附ける遣り方は結局筆者の卑小を告白するだけのものがある。いま一つ誰でも思い浮ぶ解釈は、アーノルドとカーライルとが氣質的に反撥しあつていたのではないかというのである。これは勿論多分の真理を含んでいる。後にも言うように両者は氣質的にも前代のリチャードソンとフィールディングを思わせるような相容れぬものをもつていたようにも見える。併し凡てを氣質の相違に帰してしまつてそれで能事畢れりとするような批評には賛成出来かねる。それは結局ローマの諷刺詩人マルティアリスの詩句をもじつて十七世紀の

Tom Brown (1663—1704) が歌つたことを是認するようなものである。

I do not love thee, Doctor Fell,

The reason why I cannot tell;

But this alone I know full well,

I do not love thee, Doctor Fell.

一体この世の中では人間の行動や性格に善悪高下の差別があつて、我等は絶えず悪と下とを去つて善と高とに就くことを要求せられているというのが常識の立場である。氣質を口実にしてかような努力をやめようとしても、そんな蟲のよいことは許されない。併しこの世に於てはかような理性の要請は常に無視され勝である。そんな場合我等は氣質の相違が絶対不可抗であるような歎声をもらすことはある。併しそれは謂わばしよことなしてあつて決してそれに満足するものではない。氣質の相違が決定的であるという見方は人間の努力の価値を認めないものであるから自然主義的であつて人間主義的でないということが出来る。選択、努力というようなことに意味を認めて緊張した生活を送るものから言うと、凡てを氣質に帰するような自然主義的説明は何の教訓をも利益をも齎さないものである。それでアーノルドのカーライルに対する不満もこれを人間主義的に見る必要がある。これを両者の根本思想に結びつけ、両者の人生觀の根本的相違から出るものと解することが出来るのではなからうか。そうであつてこそアーノルドのカーライルに対する批評が公的性格を帯び、人類的意義を獲て来るのではあるまいか。アルベルト・シュワイツァーは「自分には最早個人的生活はない」という意味のことを言つているが、アーノルド、カーライルというような文人も私人としては存在しなくなつてゐる程度の人である。彼等の言説はそれ故個人的平面に於てではなくて、人類的平面に於て取扱わるべきである。

カーライルとアーノルドとの根本思想が何であるかということになると、一寸要約するに困るが、カーライルのそれを代表するものとして彼の「英雄崇拜論」をとりあげ、アーノルドのそれを代表するものとしてその教養論をとりあげるな

らば、大して選択を誤つていゝとは言えないであらう。そうしてこの両方の議論を明にする間には、両者の他の根本的特色も——若しそういうものがあるならば——自ら潜在的に或は顕在的に出て来るだろうと望むことは恐らく無駄ではないのではなからうか。

カーライルの「英雄崇拜論」がフィヒテの「学者の本領」にヒントを得たものであることは周知の事実であるが、併しカーライルの英雄の観念はカーライル独自のものであると言つてよいであらう。そうしてこのカーライルの英雄なるものの面目が最も躍如として描き出されたのは、該書の第二講「予言者としての英雄マホメット」を論じた処に於てであることも恐らく衆論の一致する処であらう。カーライルに依るに、英雄とは真摯 (sincere) な人である。而もその真摯たるや、彼が「口にすることを得ず、自ら意識せざる」底のもので、彼は「独創的」(original) な人間であり、自然から「じかに」(at first hand) に来た人間である。彼は物事の外觀を看破り世の道聴塗説に迷わされない。マホメットの如きも自らじかに見、じかに擲えた真理を把持して、「議論倒れのギリシアの諸宗派や、ユダヤ人の曖昧な伝説や、アラビアの偶像崇拜教の詰らぬ慣習」などというものに囚われなかつたことを偉なりとしている。茲に旧びて死にかかつた文明社会と、新しい生命潑刺たる自然との対立があり、英雄とは後者の使徒として現われて前者を更新改革し、それに新しい生存期間を約束するものという風に見られていることが分るのである。「英雄崇拜論」中でも、ルッター、ノックス、クロンウェル、ナポレオン皆こういう亂世の雄のような性格を帯びて居り、ダンテ、バインズも文人ながらやはりそういう風格を備えている。シェークスピア、ジョンソンはやや之と異なるタイプに属するといえようが、カーライルは此等と完全に共感していないと言ふことが出来る。カーライルの「フランス革命史」に主人公ありとすれば、それがミラボーであることは十目の視るところであるが、彼も「ミラボー論」に言われている通、「あらゆる慣例というものを呑んでしまつた」(swallowed all formulas) ことを真面目とするカーライル流の英雄である。このカーライルの英雄観を諦視すると、それは所謂ロマン主義的天才の様相を帯びていることに氣附かざるを得ない。そしてそれはルソーの自然復帰説と同

じように、プリミティヴィズムの烙印を押さるべきものである。そしてその系譜を溯ればエドワード・ヤングの「創作管見」(*Conjectures on Original Composition*)に達することは疑を容れない。例えば、ヤングが「独創的作品(an original)とは草木の如きものと言つてよいであろう。それは天才の生きた根から自ら生い立つ。それは生長するけれども制作されない」などと言つてゐるを曩のカーライルのマホメットに就て言つてゐることと対比せよ。

カーライルは「過去と現在」の中で、「各人が英雄なれ」などと言つてゐるけれども、英雄と我々凡人とが彼の言う程異なつたものであり、而もその英雄の本質が意識的努力に俟たないものであるなら、我等は一体どうすればよいのであるか。我等は手を拱いて英雄の降来をまつより外ないことになるではないか。かようにしてカーライルの「英雄崇拜論」が根柢には自然主義的のものを蔵しているのにひきかえ、アーノルドの教養論はあくまで人間主義的であるということが出来る。「教養と無秩序」の中に於て彼が定義してゐるように、「教養とは完全の追究(a study of perfection)」である。そうしてそれは意識的努力に依存する。アーノルドは「ハインリッヒ・ハイネ論」の初に於て、カーライルがドイツ浪漫派の神秘主義に共鳴しすぎた過を指摘してゐるが、カーライルの議論が無意識重視の弊に陥つてゐることは、早い頃の *Characteristics* (1831) に著しいばかりでなく、「過去と現在」や *Latter-Day Pamphlets* にまでも及んで、それが彼には如何に本質的であるかを明にしてゐる。これにひきかえアーノルドは「意識の自由と知力の柔軟性」を重んずるヘレニズムを唱えて、光明を欣求したゲーテの真精神を伝へてゐる。而も信仰とか良心とかいう種類の「自らの最もよき光」に従つて歩むことの危険を覺つて、「自らの最もよき光が真に最もよき光」であるか否か、客観的検討に堪えるか否かを確かめねばならぬとしているのは、人間が神がかりの神秘主義に陥る時、権力主義の陥穽が同時に待ち受けてゐるということを反覆力説して倦むことがなかつたフランスの故セイイェール男爵 (*Baron Seillière*)⁽²⁾ と相通するものがあるのである。

アーノルドはかように意識的努力に重きを置いたが、それではその教養の為に選んだ手段は何であつたか。それは

「世界に於て考へられ言かれた最もよきもの」を我が物とすることであつた。この片断角文化というようなものゝ影響の

「世界に於て考えられ書かれた最もよきもの」を我が物とすることであつた。この点兎角文化というようなものを生命のひからびた死文の堆積と見がちであるカーライルと正に對蹠的な立場を取るものと言ふべきである。それと共にカーライルと比較してアーノルドに著しいのは、模倣、模範という如き一連の思想である。カーライルに於ては模倣は唾棄すべきものであり、従つて模範というようなものもあり得ない。之に反してアーノルドは「水は方円の器に従ひ人は交る友による」ことの認識をゆるめない。従つて彼は「詩の研究」に於て、試金石として役立つべき世界文学の莊重体への親熟の感化力を強調するのであり、古典の価値を力説し、若しその感化が望み得られない場合の代替物としてのミルトンのそれに期待するのである。使徒パウロがイエスを夢寐にも忘れなかつたように、彼はトマス・アケンピスやウィルソン僧正を不羈の友とし、彼の「備忘録」中に彼のよつて以て薰陶鑄されることを望んだ金言名句を何十度となく繰返し書きつけることをも敢てしたのである。

カーライル、アーノルド両者の人生に対する根本的態度がかように違ふとすれば、それは折にふれ事に際して表われて、種々の違つた様相を露呈すべき筈である。それで以下少しく代表的な問題に就て両者の態度の相違を明にして見たいと思ふのである。

上にも述べたようにカーライルは伝統とか文化とかを寧ろ邪魔物扱いして、自己の根源に帰らうとする。この立場からすれば、彼は必然的に自らの属するアングロ・サクソン民族の讚美者たらざるを得ない。若しそうでなかつたら、彼は自己に絶望しなければならぬ筈だからである。果然彼はギリシア、ローマの古代民族よりも北歐民族を上に着こうとするのである。この態度が最もよく現れているのは、「英雄崇拜論」の第一講、「神としての英雄オーディン」に於てである。彼によれば北歐神話は「深い、素朴な、真剣な精神の誠実なる思想」であつて、「偉大な素朴な真摯さ」が籠つて居り、「昔のギリシアの異教の軽やかな上品さ」に優ること万々であるという。元来ロマンティックイズムなるものは古典の伝統に對する北歐人の反逆という一面をもつてゐるので、フランスの Reynaud に *Le Romantisme: ses origines anglo-*

乳をのみ、離乳期にギリシア語の御粥を食べさせられた」(suckled on Latin and weaned on Greek)と言われている位で、彼は晩年にも毎日ディナーの前に一時間ギリシア語を読むことを日課としていた。それで親熱愛着の点でカーライルと先ず著しい対照をなす。そうして彼のギリシア文化に対する評価は最高度のもつと言ふことが出来る。彼がオックスフォード大学の「詩学教授」の就任講演である「文学に於ける近代的要素」の論は、近代的要素に富む文学はローマの黄金時代にもエリザベス朝にも見出されず、ギリシアのペリクレスの時代に見出されると主張しているし、「異教及び中世の宗教的情操」に於ては、乾いた光の理性のみにても不十分であれば、感情の潤いある想像のみに頼つても不可である。「想像的理性」(imaginative reason)の支配の行われた時代こそ理想的であるが、かかる黄金時代は西暦紀元前五百三十年から四百三十年に至るアテネに見出されると結局同じ結論に落着くのである。「イートン校に於ける講演」は科学教育万能の新傾向に対して古典教育の価値を高調したものである。アーノルドの眼から見て、人生を凝視してその全局を達観し得た者はソフォクレスに外ならなかつた。⁽³⁾

次にヨーロッパのいま一つの大きな伝統であるヘブライズム、基督教に対する両者の反応は如何であろうか。カーライルはその初、スコットランド長老教会の牧師たるべく教育されたのであるけれども、ヒューム、ギボン、ヴォルテール等の書物を読んで後、牧師たることは信念に矛盾することを感じて之を断念したのである。その後も信仰深い母親にあてた手紙などに於ては、自分の思想と彼女のそれと根本的には一つであることを強調したけれども、そうして確かにそういう処もないではないけれども、彼はキリスト教は既にあるが如き形に於ては少くとも時代遅れであると信じた。「衣服哲学」の中では、キリスト教をば、「ヘブライの古着」だと言っているし、「スターリング伝」ではスターリングが英国々教の僧となつていた短い期間を全く使命を誤つたもののように見て居り、「僧侶」を「黒衣をまとつた竜騎兵」(black dragons)などと悪口を言つている。一八四八年頃瀕死のキリスト教に最後の一撃を与えるつもりで「ユダヤ街からの脱出」(Exodus from Houndsditch)なる一書を著す意志があつたことはその伝記に記されている。その上イエスに

対しても彼は一応の尊敬は表明しているけれども、それほど本音であるか怪しいところがないではない。アメリカの批評家ブラウネルはカーライルの「十字架の人」(the Crucified) に対する言及が御座なりで機械的だ (perfunctory and mechanical)」と斷言している。

カーライルは中世のカトリック教を高く評価した。「過去と現在」の中のアボット・サムソンの描写を見ればそれは分る。併し近世のそれにはひどい点しか付けない。「ラタデー・パムフレツ」の中のイグナティウス・ロヨラなど全く糞味噲である。之に反してルッター、ノックスなどの宗教改革者はひどく持上げている。殊に十七世紀の清教徒は真に信仰に生きた最後の人々として礼讃を吝まない。後世の人々が狂信 (enthusiasm) として排斥した彼等の行為に対しても、「クロンウェル伝」でやんやの喝采を送っている。王政復古以後は無信仰の二百年だと見ている。牛津運動の如きはピューリタニズムの名の下に唾をひつかけるにも値しないと考えているようである。

アーノルドのキリスト教に対する態度は殆ど凡ての点で之と対蹠的である。アーノルドはドイツのテュービンゲン学派の聖書の高等批評を受け入れるほど進歩的であるが、キリスト教の精神を維持保存することの必要を痛感し、「文学とキリスト教理」、「聖パウロと新教」、「神と聖書」、「教会と宗教に関する最後の試論集」等の著書を専らこの目的の為に捧げた。今まで普通のアーノルドの批評家はこれ等の宗教論をば文学者がいらざることにならば、よつ、か、いを出したという風に取扱つて来たのであるが、これ等に彼の一生の努力の中に於ける中心的地位を与えることなしには、彼の全一の姿を捉えることは出来ないとしたのがバジル・ウィリイの「十九世紀諸研究」である。

ドイツの新しい神学思想を取入れた点に於て、彼は父の子であると言えようが、オックスフォード時代にあのニューマンの魅力を感じたことのある彼は、カトリック教に深い愛着を感じざるを得なかつた。彼は機会ある毎に偏狭な猜疑心の為にカトリック教の長い伝統と大きな存在に目を掩う同国人を戒めた。彼の一生の帰依を繫いだものは英国教会であつたが、それはカトリック教会と共に歴史的、伝統的なものであつて、清濁併せ呑み、その中に殆どあらゆる陰影の宗派信仰

を容れ得るが為であつた。彼が「聖パウロと新教」に主張するところに従えば、グリーンなどの史家が言い且つ一般人が信じているように、英国教会が清教徒を迫害して駆逐したのではなく、いつも教会がさしのべた妥協の手を頑固偏狭に斥けたものが清教徒であつた。彼の英国文化に於ける清教徒の役割に関する断案はカーライルのそれと正反對である。「英国の偉大なる中流階級は清教主義の牢獄にはいつて、爾後二百年間そこで自分の精神に錠を下してしまつたのである。」カーライルが礼讃して措かないルッターやクロンウェルもアーノルドに遭うと忽ち冠履顛倒する。彼は「フォークランド卿」の終に於て言う。「宗教に於ける天才的フィリスティンがルッター、政治に於ける天才的フィリスティンがクロンウェル、文学に於ける天才的フィリスティンがバニャンである。」

政治に關しても両者の態度は殆ど凡ての点で食い違つてゐる。カーライルは労働階級の出身で彼等の境遇に深厚なる同情を寄せた。それが彼をして一種の急進主義者^{ラディカル}たらしめ、不労徒食の貴族階級と自由競争をモットーとする企業家連とに激しく反撥せしめた。「チャーティズム」や「過去と現在」はかくして生れたのである。併しながら彼は民衆の自治能力を信ずることが出来なかつた。「雄弁は銀、沈黙は金」と唱える彼にとつて、議会の如きは、「国家的井戸端會議」(national palaver)でしかあり得なかつた。かくして彼の唯一の希望は、クロンウェルのような英雄が現れ、殆ど有無を言わず、国民を強力に統治することであつた。正義が力であると同時に力が正義でもあつた。狂人が高い窓から地下に飛び下りようとする時、正常な人間が之に締めジャケツ(strait-waistcoat)を着せてその身柄を拘束するのは当然である。西インドの黒人が西瓜を食つてなまけて遊んでいる時、之を働かせるのは白人の義務でもあり權利でもある。かくて優者が劣者を支配するのは劣者の為でもある。この優劣の關係を定める為の手段として戦争はやむを得ない。カーライルのこの考には、帝国主義の萌芽以上のものがある。キプリングはカーライルの風を望んで起つた者といえよう。ジャマイカに黒人の叛亂が起つた時、疾風迅雷耳を掩う暇もあらず戒嚴令を布き、渠魁をはじめ六百人を死刑に処して之を見事に鎮圧した大守エドワード・ジョン・エアが人道主義的見地から裁判に附せられた時、彼の無罪を主張した文人の

群の筆頭にはカーライルがあつた。アーノルドは個人的利益の追求に専念して、国家社会を念うことの全くない自由主義の前途にはただ無政府状態があるのみのことを痛感して、万人の良識を国家に代表させ、進んでその權威に服従することの必要を説いた。この点では彼とカーライルとは多少相似た立場にあつたと言ふことが出来よう。併しカーライルにあつては、優者と劣者との間の溝渠は埋められずその融和は考えられなかつたのに、アーノルドは平等が殆ど實現されて、上中下の階級が共通の立場をもつてゐるフランスの社会を理想に近いと考え、それが實現の手段としては長子相続制の廢止をも望ましと言ふ。現状のままでは、「英国社会の不平等は上流階級を物質的ならしめ、中流階級を野卑ならしめ、下流階級を野獸的ならしめる」外なき。(“Equality,” in *Mixed Essays*).

カーライルに於ては国家の施策たるべき教育も移民も住宅の建築も衛生も軍隊的強制を思わせるものがあつた。アーノルドに於ては最も多くが模範と暗黙の裡に作用する薫染の力から期待された。私人が設立する学校ではどうせ急場の間に合せの二流三流のものしか出来ない。国家のものに代えれば堂々とした一流のものが出来る。その教育的効果の相違推して知るべしである。中流階級の非国教徒は所謂禮拜堂チャペルに通うが、それは如何にもコンコンと人目忍んでという風(hole-and-corner)な趣があり、而も国立教会に対する猜疑嫉妬の念を忘れることが出来ず、反抗独立の精神を以て心に鎧を着ける。彼等をゴシック建築の粹をあつめた会堂に入れて幾世紀の洗練醇化の過程を経て来た儀式に参加せしめ、全国的な教会の一員であるとの自覚を与えることが若し出来るとするならば、その彼等の心を引上げ、おうどかにする効果は恐らく計り知られぬものがあるのではなからうか。

カーライルが戦鬪的な帝国主義を唱え、優越民族の矜持に燃えているのに、アーノルドはその矜持こそ英国人の缺点であるとして彼等が他国民に愛せられるような人間になることの必要を力説する。慈悲忍辱の諸徳こそ彼がキリスト教の果実として礼讃するものなのである。「人類を我が味方にする為には人類の氣に入る必要がある。氣に入らんが為には愛されるような人間でなければならぬ。」「柔和なる者は地を嗣ぐべし」⁽⁴⁾。

次に両者の文学に対する態度を比較して見たい。上田敏は元來カーライルを好まなかつたが、ただ「凡て最も内奥にあるところのものは旋律的であつて、自ら歌となつて現れる」という「英雄崇拜論」中の言葉には真理が含まれていると言つたことがある。カーライルの文章の最もよき部分は散文ではあるけれどもかような音楽をもつてゐる。またオリヴァー・エルトンはカーライルが飛耳張目、生ける人物の相貌と声調との微に入り細を穿つて描写し、之を紙上に躍如たらしめなければ己まぬ靈腕を有することを例示している。その他色々優れたところが多いにも拘らず、カーライルは芸術家的天分乏しく、形式美に対する関心が薄かつた。それを証明する最も面白い事實がある。彼は「ゲーテの死」と題する論文を結ぶに當つて、ゲーテの「一般的告白」(Generalbeichte) ⁽⁵⁾ という詩の一行、

Im Ganzen, Guten, Schönen resolut zu leben

を引用しているが、その Schönen の一語を態々 Wahren と改めているのである。これは彼として気分こそぐわぬことを感じたが為としか考えられない。それでなければ何を苦んで特に改訂する必要があるか。

形式美に関心乏しき者は内面的衝動に促されるままに揮灑して、自らの筆に控制を加えることを忘れ勝である。かような人の文章は表現力は勝れているけれども、全体として整齊円満を缺く。カーライルの「過去と現在」やそれ以後の作品にはかような缺點があらわである。結構布置が滅茶滅茶であり、人を喰つたように自らの文章を匿名で引用する癖があり、傍若無人の嘲笑が高らかに響く。読者は屢ば苦痛を感じて巻を擲とうとの衝動を感じると言つても過言ではない。かようなマネリズムの著しいカーライルの著作の中で、最も癖がなく、形が整つていて、渾然たる芸術品に近いものと言うと、「バーンズ論」のような初期の評論と、後期に於ては、「ジョン・スターリング伝」と「エディンバラ大学総長就任演説」との二つである。前者に於てはカーライルは比較的無名の「エディンバラ評論」寄稿家として自己に抑制を加えることの必要を感じて居たし、「スターリング伝」に於ては友人の靈に捧げる手向草であるという意識と、「就任演説」に於ては一世一代の晴の儀式であるという感じとが外面から作用して、彼の内面的紀律を補つたものと解釈することが出来る

ようである。

アーノルドは之に反して形式美に対して、英国人としては寧ろ異常の関心を示している。その最も著しき例は一八五三年の詩集に付したる序文に見出される。彼はそこでゲーテの言葉を引用して結構布置——所謂 *Architectonicè*——の、部分的の美よりも重んずべきことを強調し、更にまたゲーテを引用して、詩はただ靈性と感情とあれば足るとして、技巧的方面を蔑にする者と、ただ技巧の修練熟達をのみ事として、精神内容を疎にする者とを共にディレタントとして排斥しているのである。殊に部分的美の魅惑に余りにも富んでいるシェークスピアの模範が往々にして年少詩人を邪道に導く危険ありと説いているのは、画龍点睛の妙がある。

また彼は偏僻と過度と極端とを斥けて、節制と中庸との美を求めた。この理想は「アカデミーの文学的影響」の中に於てキングレークの「クリミア戦記」の調子外れ (*false notes*) を指摘している処に最もよく現われている。それは非常に繊細でも厳格な内面的感覚をもつ者でなければ氣付き得ぬところで素人目には寧ろ魅惑的でさえある。アーノルドは詩と散文との限界を意識してそれを超えようとしなかつたが、屢ば之を超えたラスキンやカーライルの散文ほど心酔者や模倣者を生じなかつた理由でもある。それだけに寧ろ生命が長いのではないだろうか。

最後に簡単ながら人としての両者の相違に触れて置きたい。ボズウェルはジョンソンが最初から「王者」 (*arrogant*) の風格を備えていたと言っているが、カーライルもその点同様であつた。彼の一家は彼一人を特別扱いにして大学に送り、学友は彼を、スウィフトになぞらえてディーンと呼び、彼より門地すぐれ才色兼備である彼の妻は謂わば文なしの書生つぽである彼に嫁して貞淑に仕え、七年の幽棲をすててロンドンに出ると忽ちに有名となつて文壇の大御所のような地位を獲得するというのは非凡人でなければ到底望み得ぬことである。尤もその間に教師をしたり、売文生活をしたり、また「フランス革命史」が出るまでの貧乏生活の苦勞もするに足した。併し彼には子供はなかつたし、自己の使命と心得る著作以外には何の仕事もしなかつたのであるから、一番我が儘をすることの出来た人間と云うことが出来る。ア

アーノルドのような視学官という定職をもち、何人かの子供をもつた人間の苦勞を彼は知らなかつたと言つてよからう。彼は性格が凡人ばなれがして、同様に生活も凡人ばなれがして、沈黙を尊び、テニソンと対坐半時間、双方煙草を吹かすのみで一語も交えず相別れたというような逸話が伝わっているに拘らず、喋舌り出すと相手構わず喋舌りまくつた。隣家の鶏の聲に悩まされて不眠を啣ち、遂に屋上に完全防音装置の一室を作つてやつと落着いた。このような世間放れのした生活にも一因があると思われるが、カーライルには何処か平衡を缺いたところがあつた。彼はロンドンの肩摩轂擊裡にあつてとてもひどい孤独感に襲われた。彼の妻に先立たれると、彼の悲歎は傍の見る目も氣の毒であつた。"Wae's mei wae, wae!" "If I could but see her once more!" 彼は深い自責に我と我が身を苦しめた。彼は細君を虐待したのだからとか何とか色々の揣摩臆測が逞うされた。

かく言えばとてカーライル夫妻のロンドン生活を灰色の色調に塗り潰されたものと想像することは當を得て居ないだろう。「スターリング伝」を見ると友情に厚く、随分社交的なカーライルの明るい面が見られるのである。さりながら使命への献身の生活——自己没頭の生活は愛情を小出しにする機会を奪ひ、人間を超人的——換言するならば幾分非人間的——ならしめるということも亦、否定の出来ぬことだろう。

それに比べればアーノルドの生活は全く人並である。彼は視学官という忙しい仕事をもつて居り、それが為詩人、文人としての使命に忠実であり得ないことを歎いたが、さりとして職業を抛つとか何とかいうこともせず、忙しいうちに見出される時間を如何に利用して、自己の教養を高めるかの問題に腐心した。ラウリー、ヤング、ダンという三人のアメリカの学者が編集に約二十年を費して後に公にしたアーノルドの「備忘録」はかような惨憺たる苦心の迹を遺憾なく現している。その中に彼が座右の銘にするような目的を以て選出された金言名句はギリシア、ラテン、英仏、独伊等の国語に互り二千何百年間に及んで居るが、新約、旧約両聖書からの抜萃に次いで、トマス・アケンピスからのものが圧倒的に多く、大分の距離を隔ててゲーテ、サント・ブーヴのものが次いでいる。彼の心を満たしていたものが凡そ如何なるもので

あつたかは分ると思う。なお彼の伝記は彼の視学官としての著書報告が精到綿密真に良心的なものであることを告げている。彼の時間の大部分がそれに捧げられたことを思えば、人間としての彼を考える時、この方面の仕事を軽視してはならない。詩や文学批評のそれに比べてそれが如何にじみな引立たないものであろうとも。

(1) Epigrams, I, 32:

„Non anno te, Sabidi, nec possum dicere quare,
Hoc tantum possum dicere, non anno te.”

(2) 彼の著書は概ねロマンティシズムの弊害を攻撃したもので、その数五十巻を超えている。 Louis J. A. Mercier は *The Challenge of Humanism* の一章を割いて彼の思想の大綱を紹介している。

(3) *To a Friend (a Sonnet)*, l. 12: “Who saw life steadily, and saw it whole”.

(4) *Preface to Irish Essays*. この節に述べた点は「英語青年」本年五月号に「Matthew Arnold と平和」なる題下で詳しく論じて置いたからここには繰返さない。

(5) 序ながら甚だ興味深いのは、Walter Pater が “Winckelmann” の中でカーライルが訂正した *Wahren* とどう形でこの一行を引用していることである。あれ程美に関心が深かつた Pater であるから、若し原詩の文句に彼が親熟していたら、必ずそのものままの *text* を引用する筈である。カーライルの文句を引用していることはその方が原詩よりも深く記憶に止つていたことを証明すると思う。ドイツ文学紹介者としてのカーライルの影響の大きなことの一証左とするに足ることではあるまいか。